

# 若者たちの感想文集

## 多くの刺激をもらったフィールドワーク

吉澤 杏奈（福島・大学生）

私は8月21日（木）のフィールドワークに参加しました。漁業、農業、そして沿岸地域の視察を行い中身の濃い一日のなかで感じたことや自分なりの意見を、全国各地からの学生や大人の方々と共有することができました。

最も印象に残っているのは、相馬双葉漁協での漁師・石橋正弘さんのお話でした。船も漁具も、すべてそろっているにも関わらず、週に2回程度しか漁をすることができず、漁業メインの生活ではないこと。そして福島で水揚げされた魚は、何重もの厳密な検査を行った安全な魚でありながらも、安値で売られてしまうのに対して、数キロしか離れていない宮城県では自主規制も試験操業もないことなどを語っていました。

「県境を隔てて、このような違いがあっていいのだろうか。漁師としてのプライドをもって検査を行い、安全であるという自信があるのに、それでも多くの人々はフクシマのものではなく宮城県沖のものや他県でとれたものを選んでいく。だから、〇〇県産と書いていないものは大抵福島県産のものです」と石橋さんはおっしゃっていました。このお話を聞いたとき、私の親戚が南三陸で漁を行っているため、「同じ被災した漁業地域でもこんなに大きな溝があったのか。福島でもあちこちで漁が出来るようになってきていてよかった、と思っていた自分はなんて浅はかで無知だった」と、少し複雑な心境になりました。同時に、「福島」という名だけで苦しまなければならない多くの人々がいるということを知りました。

全日程の参加はかないませんでした。自分は何をすべきなのかという役割をそれぞれ考えて、目標に向かって行動し続ける同じ年代の学生たちと交流することができて、たくさんの刺激をもらい、良い経験となりました。彼らのように、3年以上の月日が過ぎても福島を思って足を運んでくれる人々がいることを、福島に住む一人として、うれしく思います。私はいま、英語を勉強しています。なぜなら、英語を通じてより多くの世界中の人々に様々なことを発信できるからです。そしてこれが私自身の使命だと感じています。今回の研修を通して、「メディアでは知らされない情報や大事な出来事を自分の五感で見出し、それを国内外に発信していこう」と、改めて強く思いました。

## 心に残った「ヒロシマは終わらない。終われない」

飯村怜奈（福島・大学生）

私は今回参加して初めて、平和ゼミナールやエバーグリーンといった団体のことを知りました。自分よりも年下の学生が、社会や世界の動向、現状、問題に向き合っている姿を目の当たりにし、ただただ驚くばかりでした。同じ日本に住んでいるのに、広島や、第五福竜丸のこと、核被害のことを私は知らなかったのです。同じく核被災をした福島に住んでいるのに何も知らない、何もできない自分を恥ずかしく思いました。そもそも、私は現在、福島市に住んでいますが、生まれ育った所は群馬県です。福島大学を選んだ理由は、試験の結果ということもありますが、震災後の福島で

学びたいと思ったからでした。しかし、福島に住んで3年が経ちますが、自発的に、何かを得られたのか？という問いに対して、はっきり自信を持って答えられないかもしれません。ただ、今回の会を経て、まだまだ私がやらなければならないこと、学ばなければいけないことがたくさんあるのだということは自信を持って言うことができると思います。

「ヒロシマは終わらない。終われない。」

今回一番心に残った言葉です。これは福島も同じです。つらいこと、悲しいことはつい忘れてくなってしまいます。忘れて、新しい生活や楽しい日常が戻ってくれば、それが一番楽なのかもしれません。ただ、忘れてしまえば、それは関心のないこと、つまり無関心へと変わってしまうのです。私たちは決して忘れることなく、核被害のことを考えつづけていかなければいけない。それを改めて実感しました。

### “自らを当事者に置く”ということ

星 悠 （福島・大学生）

私は今回、シンポジウム、交流会などに参加し、また夜は学生と一緒に宿泊し、とても楽しい夜を過ごすことが出来ました。

シンポジウムで印象的だったのは、私と同世代の若者たちが、まず行動を起こすことの大切さを感じながら、当事者としての自覚を持って、日本や海外で活動しているということでした。実は私自身もこれまで様々な形で福島と向き合う活動に参加してきましたが、そのたびに充実感と同時に、ある種の怖さを感じるがありました。それは“自らを当事者に置く”という怖さです。

私たち若者にとっては、本来なら目を背けたくくなるような問題と向き合い、傷つき得る経験を重ねるといことは、とても過酷なことだと思います。さらに言えば、「正しいことを訴えているのに、なぜまわりの仲間もっと分かってくれないのだろう」という、言いようのないもどかしさも生まれてくるものです。

震災、原発事故以降、私自身も少なからずそういった意味での怖さを経験しました。

しかし、今回参加した高校生や大学生は、その逆境を凌駕するエネルギーと気迫と信念を持って活動していました。私は率直に、とても勇気づけられました。彼らから発せられる言葉、そこから垣間見える勉強量と見聞の広さは、年齢や立場を超えて説得力がありましたし、世界の平和のために本気で自分に出来ることを考え、活動をしているその姿に、胸を打たれました。そして、そうした若者たちの声に耳を傾け、その熱意を受け入れるための土壌作りをされている大人の方々がたくさんいることにも大変感銘を受けました。

今回の同世代の若者たちとの出会いは本当に刺激的なものでした。全国でいろいろな形で福島を見つめ、学んでくれている仲間がいることが分かり、純粹にうれしく思いました。そしてこれから、自分の出来るアクションをしっかりと考え、今福島を生きる“当事者”として、積極的に活動していこう、と決意を新たにしました。本当にありがとうございました。

## 平和ゼミナールに参加して

菊地亜莉沙（福島・大学生）

私は今回の平和ゼミナールに参加して、福島県に住んでいても分からなかったことや知識不足だったことがあり、もっと自分の住む街を知る努力をするべきだと感じました。将来食に携わる者として、正しい判断をして食材を選ぶ必要があるし、福島の食材の安全性を誰に説明しても納得のいくように伝えていかなければなりません。そのためにも、今後も漁業、農業等の状況を随時把握していきたいです。

遠くに住む私と同年代や年下の子たちが、福島県のために何かできることはないか、またどんな状況にあるのかを真剣に考えてくれたことで、私はとても刺激を受け、嬉しく思いました。また、風評被害が顕著にあらわれていた福島県に足を運んでくれたことだけでも素直に喜びを感じました。「福島に来てよかった。福島の食べ物はおいしい。地元に戻って福島の現状を伝えたい。」と言ってくれた子も多くいて、今回の活動を行ったことが意味のあるものになっていると改めて感じました。

私はボランティア団体や平和ゼミナールの団体に所属しているわけではなかったのですが、昨年広島で行われた平和学習に参加したことで今回の活動に参加させていただくことができました。昨年の平和学習でも、若い私たちが日本の将来を担っているということを深く感じました。私は昨年の対話集会で、若者たちが核について学ぶ機会や、意見を交換できる場を設けてほしいと話したので、一年後にそれを実現できたことを嬉しく思います。今後も様々な地域の若者との交流を続け、被災地の復興と二度と福島のように苦しい思いをする地域が出ないように私たちができることを考えていきたいです。

今回の活動に携わったすべての方に感謝し、また一歩ずつ復興に向けて歩んでいきたいです。自分の身近な地域でも災害支援ボランティアを行っていると分かったので、そのような活動にも参加してみたいと思います。

## 「2014 震災・核被害に向き合う学生の集い」を経て

渡邊恭子（福島・大学生）

今回の集いで感じたことは、現地を訪問し自分の目で福島の現状を見ることの重要性である。そして、そこで感じた個々の思いや意見を交換し合うことはとても意味があったと思う。私は福島に住んでいるが、現地を訪れて初めて知ることも多くあり、福島の現状を発信していく一人として、自分の無知さに反省した面もあった。話を聞いていて印象に残ったのは、漁師さんの話にあった試験操業である。濃密なモニタリング検査を経て安全な魚を出していても福島という名前によって安全を懸念し、福島の魚を買ってくれる消費者は未だ少ない。福島に住んでいる者として又食に関わる者としてはそのような事実があることがとても悲しかった。この事実を他県の人にはどのように思っているのか疑問に思い意見を聞いてみると、濃密な検査を経ても抵抗があると言っていた。濃密なモニタリングを行っても危険なイメージを取り除くことは難しいのかと思った。しかし福島には

素晴らしい風景や美味しい食べ物があって沢山いいところがある。そのようなイメージを少しでも変えていくために、又福島頑張りを見せるためにも私たち若者が先陣を切って各地に伝えていかなければならない。さらに、将来栄養士として食に関わる者として福島の食材の安全性を生産者の方々と一緒になって伝えていきたい。

震災による原発事故が今でも私たちに苦しめている。しかし前向きに生きている人がたくさんいるのも事実である。この事実を真摯に受け止め、二度とこのような悲劇を起こさぬよう未来に発信していきたい。

## 福島を離れて

尾形 沙耶子（福島・大学生）

今、神奈川で一人暮らしをしている。福島を離れて寂しさもあるが、正直ホッとしている自分もいる。福島を離れるということは、放射能からも離れられるということ。放射能を気にしないでいい生活は楽だし、安心できる。

一人暮らししているアパートの近くの公園で子どもが元気に遊んでいる様子を見ると、平和だなんて思う。最近の福島では見かけなかった光景だからこそ感じることなのだろう。当たり前のことを原発事故の影響でどれだけ制限されているか、違う地に来てこそ余計に感じる。

そして、当然のことながら福島の現状を知ることが難しくなった。福島原発で何か問題が発生しない限り、ニュースで取り上げられない。また、福島では天気予報のコーナーでその日の空間放射線量の測定値を発表していたが、もちろんこちらではない。このままでは、福島原発事故はどんどん風化していってしまうと思った。各地で原発を再稼働するかしないかと問題になっているが、もう一度福島原発事故を思い出してほしい。原発を見つめ直してほしい。原発事故から3年半も過ぎている福島が、今どのような状況にあるのか、知ってほしい。今でも原発事故は収束してなくて、放射能の影響はこれから先も続いていくということ...

## 核の時代のその先へ

村山哲文（東京・高校生）

耳をすます。大地の祈りに、耳をすます。風のささやきに、耳をすます。人間の心に、歴史の叫びに耳をすます。そして、新しい時代の夢に、耳をすます。私たちが生きるこの世界の真実に耳をすまし、ともに未来を見つめるとき、フクシマの大地は今こそ希望の聖地となる。この3日間、この地に集い、しかと現実を学び、明日を語り交わした若者たちは、ここにしっかりと手を繋ぎ、新しい未来に向かって確かな一歩を決然と踏み出していた。

今回の集いの画期的な意義は、言うまでもなくそのコンセプトの志向性・先見性にある。この「2014震災・核被災に向き合う青年・学生の集い」というテーマは、すなわち「3・11」が①核の絶

対悪性②今日の「文明」と社会構成の破たん、を象徴する人類史的なキーポイントである、という認識に基づいたものであろう。そして、だからこそその上での必然として、高校生や大学生をそれぞれ単体にはではなく、共に未来をつくる“若者”としてつなぎ合わせる、という新しい構成で彼らの対話を促す切り取り方になったのである。いわばこの3日間は、広い時空で核の本質を学びながら、核選択の岐路に立つ時代の担い手として、先の認識を確信に格上げせんとする試みだったと言える。放射能の危険がある中で、広範囲から人を集め、新しい実践を切り拓いた先生方に感謝と敬意を表したい。

1日目のシンポジウムや、2日目のフィールドワークは、まさにこの核の本質を学び、捉えなおす時間だった。シンポでは、ヒロシマ・マーシャル・セミパラチンスク・フクシマを結ぶそれぞれの活動を通して、原爆被爆と核実験、そして原発事故と、形・時代・場所がどうであれ、いずれもひとつの「核の歴史」としてその真実を位置づけなおすことができた。またフィールドワークでは、まさにリアルタイムの現場に立ち、そこで奮闘している張本人たちの話を直接聞くなかで、ここに破壊された大地があり、ここに引き裂かれた人々が生き、ここに奪われた暮らしがある、という確かすぎる悲劇的な現実を目の当たりにした。そうした真にふれる行動的な学びのなかで、僕は改めて核の多面的な恐ろしさを実感した。そのうえで、僕は自分なりに核の本質とは何かを整理してみた。次の3つである。

一つは、“終わらない・終われない”ということだ。この言葉は二上（にかみ）さんがシンポで使ったものだが、まさに核被害の真実を表している。何世代にも続く放射能の影響。ひとたび汚染されてしまえば、もう二度と生き還らない土地。何万年と放射線を出し続ける核のゴミ。ヒロシマもマーシャルもセミパラチンスクも、そしてフクシマも、収束を許されない地獄の苦しみを強いられている。終わることができない痛みをつくってしまった——。このことほど悲劇的な人間の過ちはないであろう。

二つ目は、“人間のすべてを破壊する”ということである。おびやかされるのは、自分の命や健康だけではない。そこにあった文化やコミュニティ、人間同士のつながり、絆、そして自分の将来や夢までいとも簡単に奪い去っていく。死ぬまで心身ともに深い傷を負い、差別を受け、一生ひばくを背負わなければならない。故郷を奪われ、生きがいを奪われ、牢屋のような仮設住宅で生きつづける想像を絶する苦しみを、悲しみを、怒りを、悔しさを、誰が癒してくれるのだろうか。誰が人生を返してくれるのだろうか。すべてと言い切るにはあまりにも足りないほど人間のすべてを引き裂き、破壊する核の本質を僕らは生きた人間の中に、その犠牲の上に見た。同じ人間を通して、やっと見たのだ。その遅すぎる罪は、あまりにも重い。

そして三つ目は、“人間が扱いきれるものではない”ということだ。核開発の歴史は、イコール核被害の歴史であった。人間、いや生物と相容れ得ないものだ。今も捨て場のない核のゴミを溢れるほど両手に抱えてうろろろしているありさま。事故が起きてみれば現場に近づくことさえできない。その被害も、詳しいメカニズムも除染手段も処分方法も何もかもお手上げ状態なのである。わからないこと以上に恐ろしいものはない。姿も形もおいも、およそ実態を人体で感知できる要素は何もない以上、私たちはおびえ続け、振り回され続けざるを得まい。そしてもうひとつ、強く指摘しなければならないのは、この核開発が既にして多大な犠牲を払わなければ成り立たない分野で

あるということだ。貧困層や先住民といった「社会的弱者」である人々が、人生をすべて諦めながら被曝しつづけなければ成り立たない虚構の夢想なのだ。その犠牲の構図は、あるいは都市のための地方であり、人間のための自然であり、現在のための未来であると言えるだろう。事故は必ず起こるが、それ以前にこうした根本的な欠陥を強く指摘して核の全面的な廃止を根拠づける姿勢がさらに求められている。

これが「核」である。核エネルギーの「核心」である。こうして僕たちの前に叩きつけられたその真実が示すものは、核エネルギーの絶対悪性以外の何物でもないだろう。それはつまり人類に対し、もう二度と核に手を付けるな、という歴史からの教訓に他ならない。にもかかわらず現実には、核抑止論がはびこり、原発もなくなるどころか輸出までしようとしている。私たちはまさに岐路に立っているのだ。人類としてふたたび核と戦争の道に走るのか。それとも勇気を出してきっぱり足を洗うのか。そしてこの時代性は、私たち次の世代に同時にもうひとつ課題を出している。それは“では戦争も核もない新しい社会はいかなるものか”という問いである。戦争は常に科学技術や自由競争、格差や貧困とともにあるものである。したがって核も戦争もない社会を目指すということは、今日までの「文明」や社会構造そのものを見直すところからしか始まり得ない。自然を食いつくし、欲望のままに好き放題やっていた時代は、もう破たんしている。終わらなければならない。これからは、いかに持続可能で平等な循環社会を作るか、という目標を追求していく時代である。それはエネルギーや経済はもちろん、衣食住やコミュニティーも含めてだ。人類は試されている。簡単な挑戦ではない。しかし、どれだけの時間をかけてでも、これを乗り越えていかなければ、人類に地球市民の資格はないと言っていいだろう。大きすぎる過ちの上に、これ以上罪を重ねることは許されない。

今回の集いは、これから始まるその不断の挑戦に、大きな連帯と勇気、あるいはアイデアや可能性を強くもたらすものであった。普段高校生単位で活動している僕にとって、大学生の国際的、かつ実効的な取り組みにはとても刺激を受けたし、あるいは「エバーグリーン藤枝」のように高校生も大学生も社会人も縦の繋がりで学び、活動し合う実践が作られていることは、今後のネットワーク作りに大変示唆的な意味を持つものであった。それは若者だけではなく、大人たちの姿を見ても強く感じられた。教員、元教員、映画監督など、それぞれがそれぞれに本当に多様な活動を続けており、その経験の豊富さと互いの強い結びつきは、心から尊敬に値するものだった。まさにこうして人と繋がり、共に学び合うことの強さと大切さを実感し合える出会いがあった。その風景は、改めて真に学ぶとは、真に主体であるとは、ということを考えさせてくれた。頭（知性）と心（感性）のアンテナを、体（行動）と仲間（対話）を基盤にして展開していく。この「学びの四要素」にさらに確信を深めることができた。管理・競争・効率化・格差の「4K」がとどまるところを知らず、互いの相互不干渉、孤立無援化が叫ばれるこの社会の中で、こうした豊かな学びと生身のつながりが、どれだけ大切なことだろう。学ぶということは、自分をより自由に解き放とうとする挑戦であり、自分自身において真に主体であろうとする決意なのだ。そしてその学びの中での最大の幸福は、こうして夢と主体性を持った誇り高い人々に出会い、つながれることだ。個人の夢が全体の夢と一体になった風景を共有できることだ。いかに仲間を広げ、新しいつながりを開拓するかという問いは、すなわちいかに失われた相互扶助、手を取り合って助け合いながら生きる営みをこの手に取り戻すか、という問いである。どれだけ人間の夢を守れるか、どれだけ絶望から生きる喜

びを守れるか、そういった意味でも、こうして“つどう”という営みの普遍性は改めて見直されるべきだ。

僕は、高校生活最後の学年である。その年の夏に、こうしてみんなと出会えて本当に良かった。社会に羽ばたく直前の不安と希望に満ちた僕の背中を、大きな勇気と溢れる夢で力強く抱きしめ、押し出してくれた。今僕は、とてもわくわくしている。いかにつながり、いかに実践し、いかに発信するか。すべては私たちのアイディアと行動力にかかっている。どんどんチャレンジしよう。やったもの勝ちだ。今までなかったものをそこに作り、そこにこそ仕事を作っていこう。僕たちはひとりじゃない。誰もが平和な未来を夢見ている。手を繋ごう。心を繋ごう。それがどんな形であれ、平和と自由を求めつづける姿勢を一生のライフワークとして、人生の価値として全うしよう。人類はまだまだ、決して捨てたものではない。みんなの夢と知恵と技術を、もう独占や欲望のためにではなく、平和で美しい未来のために結集しよう。僕たちは今ここに、その歴史の先駆けとして力いっぱいこの人生を駆け抜けよう。この美しい地球の上で、みんなと手を取り合いながら。

## 再び小高地区を訪れて

岡崎航平（静岡・勤労青年）

南相馬市小高区へ行きました。小高区は以前、避難区域となっていましたが、2013年8月から避難指示解除準備区域となっています。避難指示解除準備区域とは、年間積算線量20ミリシーベルト以下になることが確実であり、除染、都市基盤復旧、雇用対策などをおこない、順次住民を帰還させる地域のことです。

以前小高区を訪れた際は、検問所が設けられていて、通行証を持っていないと入れないと言われてしまいましたが、今回はすでに検問所は撤去されておりました。

町の様子は、人気を感じられない家々、一面の草原状態も、以前来た時とさほど違いはありません。ただあまりにも震災の爪痕が生々しい建物、津波で流されてきた自動車、船舶等は撤去されていたように感じました。

小高区は福島原発から20キロ圏内とはいうものの、線量はそれほど高くはなく、年を経る毎に下がりつつあるということです。だからこそ避難指示解除準備区域に指定されているのであり、住民のなかには、帰還を望む声があるのかもしれませんが。

しかし一方では線量が高いにもかかわらず帰還政策を一方向的に押し付けられている地区が存在するのも事実です。既に避難区域から外されている地区もあります。又、避難区域外からの自主避難は賠償金支給の対象外です。いずれにせよ賠償金は順次打ち切られていきます。年間20ミリシーベルトという基準も、本当に安全かどうかは分かりません。どんなに立派な肩書きを持った大学教授や研究者であろうとも、政府や原子力ムラの意向が反映されている限り、信用はできないと思います。

そういった現状を考えるといままでの帰還政策というものが、表面上だけの復興政策であって、復興しているとみせかけるための政策と思われても仕方がないと思います。

## 続ける

長谷川倅友（静岡・大学生）

2年連続での福島での活動となった。今年は昨年とは違い、数多くの都県の学生が集まっていた。

しかし、各都県に大人数というわけではなく、それぞれ2、3人での参加という風になっていた。初日のシンポジウムで、広島・東京各県の発表者に対して、活動メンバーの増員に関しての質問が飛んだのだが、各県、高校生の活動メンバー集めに苦戦しているという旨の回答が返ってきていた。高知県に至っては、来年からの高校生メンバーがいないという話だった。しかし、同じ志をもって高校生活は必ずいると思うので、細々でもいいので、各県、こういった活動・集まる集団は続けていてもらいたいと思った。もちろん静岡のエバーグリーン藤枝もずっと続けていければいいなと願っている。

1日目の夜。各県の高校生・大学生がこれまでの活動報告をした。昨年の感じでいくと、交流会も兼ねていたのだから、かなり和気藹々とした雰囲気で作るものだと想像していたが、それはまるで違い、とても緊張した雰囲気で真剣に各県の報告会が行われた。各県ともとても素晴らしい活動をしていると思うとともに、僕たちも毎年、こういったところで報告できるような活動をしていきたいと思った。その前に僕自身ここ1年参加回数が少なくなっているのだから、参加回数を増やしていきたい。

2日目、福島県のフィールドワークだった。松川浦で昨年もお話をさせていただいた漁師の石橋さんと水産事務所の平川さんにお話をいただいた。福島漁業が試験操業等を数多く行っており、それに合格した魚は安全であるというのは昨年のお話もあり、知っていたが、隣接している宮城県などはあんまりやっていないという。いかに福島で取れた魚だからという風評があるということを実感できた。

午後は今年も南相馬市、小高区へ向かった。小高神社のたくさんの絵馬に書かれていた思い・言葉、そして神社の上と下で色の違う鳥居がとても印象強かった。（震災で上のほうが損壊したため新しく復旧したため）

常磐線小高駅。昨年となにも変わってない。駐輪場には未だに無数のさび付いた自転車が置かれていた。線路も草が生い茂っていて、線路さえなければそこに電車が走っていたとは到底思えないほどだった。海岸沿いにも行った。工事をしてはいたが、その工事もまだまだ時がかかるそうだ。避難指示が解除された所と、避難指示が解除されてない小高区では復興の違いがだいぶ違うようだ。確かに、去年と比べても小高はなんも変わってないなあという印象があった。復興して小高に人が住めるようになるのは一体いつになるのだろうか・・・。原発事故さえなければと思うと、腹立たしいと感じるとともに、浜岡でも静岡でも同じようになってしまおうのかと考えると、たまったものではないと思えてくる。



2日目の交流会。この日も各県に思い思い話しをしてもらった。各県、もっと話したいこと、やりたいことがあったらうけど、時間がなくとても申し訳のないことをしたと今になって反省している。もう少し、時間に気を配れるようになりたいものだ。

発表のなかで、広島県の「せこへい」のことが一番の印象だった。来年は広島に飛ぼうかななんて考えたりもした。

3日だけという短い時間しか共にしていないというのに、別れとなるととても寂しいものである。しかし、高知の高校生と静岡の私らが2年連続で会えたように、なんだかんだで、また来年も、それ以降も、この同じメンバーで、はたまたそれにプラスして新しいメンバーを加えた集団で集まれるような気がします。来年、また集まりましょう～♪

全大会が終わって、他県の子達と別れたあと、エバーグリーンは独自で、仮設住宅に訪問しました。私自身、2度目の福島でしたが、仮設住宅の訪問はこれが初めてでした。

仮設に住まれている人のお話を伺って、昼間はみんなとラジオ体操やカラオケなんかやって楽しんでいるけど、夜になるととても不安になるという話でした。確かに、いつまで続くか分からない狭い仮設で生活をしているのだから、不安になるというのはとてもわかりました。

今回も勉強することが多く、多くのつながりを作れる良い旅になりました。先生方を始めとして、多くの方の援助があってこの旅にいけました。本当に感謝をしています。ありがとうございました。

## 格 差

立石佳歩（静岡・大学生）

3日間、福島で暮らす方々のお話を聞き、今もなお人が暮らすことが出来ない避難区域を見て思ったことは、東日本大震災から今日までの3年余りの間に、格差が広がっている、ということだった。これは、2日目にお話をして下さった、松川浦で漁師をしている石橋さんの言葉でもある。

松川浦では試験操業を行い、放射線量を測定し安全が確認された魚だけを市場へ流している。その基準は、政府が定めた100ベクレルを大きく下回る50ベクレルに設定されている。しかし福島以外の漁港では、こういった検査・規制は行われていない。海に流出した汚染水は福島以外の海にも拡散したと考えられるのに、消費者は『福島のもの』は買わず、その周辺の県産のものは買う。

私自身、石橋さんのお話を聞くまで『ほかの県の安全性』など考えてもいなかったが、これは確におかしな話である。どれだけただ一つのことを捕らわれていたか気付かされた。他の県のものが安全でないというわけではないが、少なくとも市場に並ぶ福島県産のものは、安全性が保証されているのは確かである。

また、福島県内でも、原発20km圏内地域とそうでない地域では格差が起きている。20km圏内から避難した方々は、仮設住宅で3年以上家族や親しい人々と離れ生活している。そこで暮らす人々は今の生活にも、元の生活に戻ることに不安を感じている。そして日本が原発の無い国に

なることを、心から願っている。実際、原発が動かなくとも日本は回っているということを考えれば、原発を再稼働させる理由は見つからない。

最近では、太陽光発電を利用する家庭も増えている。世界でも、福島第一原発事故を受け、原発停止・事業撤退をしている国もある。仮設住宅の方々は、『今すぐにはではなく、段階的に原発をなくしていく』ことを願っている。

エバーグリーンは、福島で暮らす人々のこのような思いを、伝えていかなければならないと思った。

## 感動いっぱい

小林 竜一郎（静岡・高校生）

私は今回、本当の福島の現状を目でみて知るために二泊三日で福島県へいってきました。私が福島県へ行って一番印象に残ったことは仮設住宅へ訪問した時のことです。今現在福島の仮設住宅では震災関連死などの問題をたくさん抱えています。私は二日目に南相馬市、三日目に飯館村の人たちが避難している仮設住宅へいってきました。いまもまだ被災している高齢者の人達を中心に集まってもらい貴重な話をしていただきました。南相馬市の 仮設住宅はおもに地震によって家が津波の被害に遭われたひとたちが暮らしています。仮設住宅は1つ1つの家がかっついていて身内の人と必ず住めるわけではなく適当に割り振られた人たちが暮らしているひともいます。仮設住宅は1つ1つの家がかっついていて自分の場所はわずか四畳半の部屋が2つあるだけの小さな部屋でした。すんでいる人のなかではとなりの部屋にいる小さい子の足音で夜が眠れなかったりだとか小さい部屋での他人への気疲れでストレスがたまるばかりだと言っていました。私も自治会長さんのお家を見せいただきましたが実際には本当に暮らしにくく夏は暑く、冬は寒いようなとてもいい環境とは言えませんでした。唯一良いことと言えば一週間に一回お医者さんがきてくれてまめに食料も届くことだといいます。私が最初に訪問した南相馬市の仮設住宅の方たちの1人のかたは(こんな環境におかれたことにたいして東京電力をどう思いますか?)という質問をしたところ私が想像していた答えと違う反応が返ってきました。最初はやっぱり放射線問題もあるから嫌いだと言っていたのに、でもやっぱり東京電力の事故がなければこうして君たちのような高校生にも会うことができなかつたからそれでそれは良かったとすごく喜んでいました。私は震災から3年たったいまでも家に帰れていないのに人との出会いを大切にしながら前向きに暮らしている人達がいることにすごく感動しました。でも前向きに生きている人だけではありません。中には前向きに暮らしながらも不安や悩みを抱えている人もたくさんいます。家に帰る見通しが無い、日々が楽しくない、子どもが帰ってきてくれないなど、ひとそれぞれ悩みをなにかしら抱えていました。でも一番悩みとして多かったのは子どもや孫たちにあえない、孫たちと暮らせない、すごく真剣な悩みでした。子どもたちはみんな福島から出ていってしまう。放射線なんてなければいいのに・・・。

聞いていてすごく印象的でした。自分は福島へ来る前に勉強したつもりでいたのに自分が知らなかつた悩みを目の前にして聞くと他人事ではないなと思いました。

三日目には原発事故で30キロ圏内にある飯館村の仮設住宅を訪問しました。飯館村の人達もやはり南相馬市の人たちと同じような悩みをかかえていました、飯館村の人たちは自分の家があるのに家に帰れない、もうこれからも帰る見通しがたっていない人たちがいました。仮設住宅の暮らしはやっぱり不便で困る。昼間はみんなとお話したりできるから寂しくないけど、やっぱり夜一人になったりすると寂しいです、など実際私たちが話したときには明るかったひとたちもすごく悩んでいました。

私は静岡に住んでいますがこの福島を訪問する前には東日本大震災や放射線について正直あまり興味を持たなかったです。でもよく考えてみれば私の家(静岡)は浜岡原子力発電所の30キロ圏内に家があるので放射線や原発についても他人事ではありません。そして静岡県もまた地震多発地域で東海地震が起こると言われています。福島へいったことはそういう意味で自分にとっても教訓になりすごくよい経験になったと思います。

## 知ること、感じること

瀧下真一（静岡・高校生）

今回エバーグリーンの活動に参加した目的である福島訪問を果たした。前から行きたいと思っていたので、この機会に参加して、現地に行けたことはとてもいい経験になった。

私が福島に行きたいと思ったのは、東日本大震災から3年が過ぎ、それにかかわるニュースがだんだんと減ってきていたからだ。震災当初、嫌というほど流されていた津波の映像もほとんど流されなくなり、現地の様子も詳しく報道されなくなってきている。そう思っていたときにちょうど福島行きの誘いがあったので、参加させてもらうことにした。

私が一番気になっていたのは、福島の復興の現状だ。巨大な地震と津波で被災三県といわれるほど大きな被害を受け、さらに国内唯一の原発事故が起こり、人が住めない地域までできてしまった。そこでの復興はどれほど進んでいるのか、どんな気持ちでこの3年を過ごしたのか、そこが一番見て確かめたかった。実際に見て、話を聞いて一番思ったのは、自分が思っていたよりとても力強く生きているということだった。漁協の方、農家の方、仮設の方、どの方々も被災の苦しみを抑え、前を向いていこうという気持ちが伝わってきた。あの事故の後からずっと、自分に何ができるだろう、どうしたらいいだろうと考え、悩んできたと思う。そうやって悩んできた結果として、今回見せてもらったような活動があり、少しずつ、確実に復興に向かっていくことを感じた。「後ろばかり向いていたら、やってられない。自分たちでやるしかない」という言葉が、とても胸に響いた。

もう一つ気になっていたのはやはり、原発事故の影響だ。放射性物質が拡散し、人が安全に住めないほどの汚染を引き起こし、いまも東京都の面積の半分ほどが住めなくなっている。とくにその影響を受けているのは、地域に強く根付いている農業や水産業、そしてそこに住む人々だ。特に農業は、再開するにはあまりにも長い年月がかかる。住めるようにはなっても、元の暮らしには戻れない。そんな事実が福島から人を離れさせている。放射性物質、放射線、そのせいで福島の復興はほかの県より、数段遅れている。これからもその差は広がるばかりだ。漁協の方、農家の方はその

ことを強く訴えている。ほかの県では検査すらしなくていい。そんな影響に対しての保障やサポートは十分だとは言えない。もともと想定すらしていなかったことが起きて、政府も東京電力も対応しきれていないからだろう。そのことに対する不満が多く感じられた。

今回福島に行って、たくさんのことを見て、聞いて、感じてきた。実際に活動している、強い思いを持っている人に会って話をすると、テレビの映像やデータを眺めるだけではわからない、思いや気持ちを感じられる。そうして初めて、そのことに向き合ったといえるのだと思う。私もこの福島訪問をしたことで、原子力発電に対する考え方が変わった。使えるものは使えばいいのになと思っていただけ、これほどの影響力があるものを、処理の方法がないものを無理して使う必要はないと思うようになった。発展を続ける太陽光発電や自然エネルギーを使ったものを広げることができれば、より省電力のものが増えれば、危険性があるものを使わなくてすむ。原発が持つ影響力を軽視していたなと今では思う。こうした体験をすることで、教室で教科書を眺めているだけではわからないことがいくらかもあることを知った。こんな体験を多くの人にしてもらいたい、そして自分もこんな活動を続けていきたいと思っている。

## 自分がやらないと何もわからない

白石美由紀（静岡・高校生）

今回、福島を訪れてさまざまな事を学びました。

福島の現状を知るのはもちろん、他の県の方々との交流を通して、私は一段と成長したような気がします。

まず、私が一番おもったことは、「如何にうわさに惑わされていたか」です。私はずっとニュースや新聞に載っている福島を見て、もっと深刻な状況だともおもっていました。農業や漁業は放射能のせいでまったく売れず、津波の被害にあった地域は全然復興がすすんでいないとおもっていたのです。それが実際福島の漁業と農業を担っている人たちに話を聞いてみると、もう全然大丈夫のようです。何重にも検査した魚や野菜、果物を販売していて、さらに時がたつにつれ、放射線もなくなっているではありませんか。しかし売り上げは伸びていないそうです。福島県産というだけで放射能を気にして買わない。そういう人がまだたくさんいるようです。でも、福島は買わないのとなりの宮城や茨城のものには疑問を持たないことにはふしぎに思いました。福島の農業者いわく「厳重な放射能検査をしているのは福島だけ」と。だとしたら、福島産が危険なのではなく、周辺の県の物の方が危険かもしれない。

危険なものがあるから危険なのではなく、危険だからこそ安全にするために努力していると認識を改めなければなりません。そして福島の「風評被害」をなくすためには、安全であることを示すこと、つまり、福島県産のものを買って食べることが福島の人たちにとってもためになることだと思いました。

他にも惑わされていたことがあります。原発が事故を起こしたからといって、東京電力の人が責められている光景をよくニュースで目にします。実は私は、それを見てかわいそうと思ってしまし

た。不慮の事故なのに東電が全部悪いのか？と無慈悲な抗議の人たちに怒りを覚えるほどでした。でも今思うと私はなんて愚かな考えを持っていたのだろうと思います。漁業の人の話では、「何も伝えず勝手に汚染水を流してしまう」と。農業の人からも「責任のなすりつけあいばかりしている」「要望には応えず、検討中と言って逃げる」。さらに仮設住宅の人たちからは「燃料棒を水の中に入れる作業をやっていたが、今は故障して止まっている。でもそれはニュースでは流れていない。」「大丈夫としかいわず危険なことを教えてくれない。」など。東京電力は私の想像をはるかに超えるほど「何もやっていない」ということが理解できました。こんな様子では、みんなが東電に無慈悲になるのはわかります。私もこれからは厳しい目で見ようと思います。

このように私は、普段からニュースにメディアリテラシーをもって見てきたつもりでしたが、今回の福島の活動で、まんまとメディアのわなに引っかかっていたことがわかりました。実際に自分の目で見てみないとわからないことだらけですね。はじめはボランティアの意味も、なぜエバーグリーンのような活動をするのかもわかりませんでした。今回の体験で少しわかったような気がします。

施す、手をさしのべることだけがボランティアではない。そこで学び、教わったことを地元で広め、貢献することがボランティアなんだと。私は今回教わったことを、静岡の地で、福島のために貢献するようがんばりたいです。

## 自分の経験は、必ずや行動のヒントに

山本悠貴（静岡・高校生）

今回、エバーグリーンの活動の一環として、福島に行かせていただきました。現地では様々な場所を見て周り、いろいろな方々にお話を伺うことができました。順を追って感想を述べていこうと思います。

まず一日目、現地に各都道府県の方々が集まり、それぞれの活動を報告し合うシンポジウムが行われました。今回のテーマである福島の原発や放射能のことに関連して、そういった方面での活動の報告会となりました。日本の放射能被ばくということで広島のお話や、カザフスタンのセミパラチンスクに行った際の体験などが聞け、日本内外に対しての放射能というものの存在について、自身の見解を深められたと感じ、とても有意義な時間となりました。その後は、その場の全員で、夕食・交流をし、各県の詳しい活動報告などをして初日はお開きとなりました。

二日目は、全体で組を分けて活動を行いました。私が属した組では、漁業・農業等の、産業面の現状について詳しく見て回りました。もう片方の組では、原発や津波被害の実態を見ていたようです。そして、3日を通して私が最も衝撃を受けたのが、この産業の面に対してでした。漁業を営んでいる漁師の方からお話を伺ったところ、やはり風評被害は多く、確証がないにもかかわらず「福島産」というだけで売れなくなってしまう、といったことが多々あるようです。しかし実際にお話を聞く中で、年々放射能に汚染されている魚が減っているという事実、そして何より、捕った魚を何重にも厳重に検査し（実際の検査法まで詳しく説明してくださいました）、「確実に安全だと、

胸を張って言えるもののみを流通させている」と言い切る漁師の方たちを見て、私の中にわずかに残っていた、福島のものを買う上での不安が、すべて吹き飛ぶのを感じました。むしろ放射能で慎重になり、検査を厳重にしている分、他県よりも安全ではないのか、とさえ思えてきました。農業の方も同じように、「安全面に対し、様々な工夫を凝らしている」、「幾重にも検査をし、安全性を保障できる」と、実例を示しながら、説明してくださいました。現地の方の自信あふれる言葉は、聞くものに強い説得力を感じさせるものでした。もちろん、実際に記録もありますから、データ上での安全も揭示できます。その後は仮設住宅を訪れ、そこでの生活を余儀なくされた方たちの心の内を聞いたり、スイカ割りをするなどして、交流を行いました。最後は一日目と同じく、夕食・交流をし、二日目も終了となりました。

最終日である三日目は、全体での報告会を終えた後、各県ごとに個々で動くことになっており、私たち静岡県は、飯館村の仮設住宅を訪問してきました。そこでは津波に家を流され、帰るべき場所を失った人達が暮らしており、自分たちの現状や不安、この事故に対する気持ちなどを話してくださいました。

福島に行って様々な方のお話を聞きましたが、現地の方のすべての言葉には様々なものが宿っており、今恵まれた環境にある自分がそのすべてを理解することはできなくとも、そこで聞いた一言一言を、いかに今後の行動の原動力とできるかで、自身のできる最大の支援としていこうと考えています。この痛ましい事故が二度と起きないように、今回の自分の経験は、必ずや行動のヒントとなってくれるはずです。

## 福島を訪れて

二上真衣（広島・大学生）

この集いを通じて、私は改めて自ら現地に赴く、ということの大切さを学ぶと同時に、こんなに美しい福島の地を汚し、そのまま素知らぬふりをしている国や東電に対して心の底から怒りを感じました。そして、段々と過去の惨劇として忘れ去られていかれている現状に焦りを感じました。

一日目の最初のシンポジウムでは、パネリストを務めさせていただき「広島とセミパラチンスクを結ぶ」という題目で報告をさせていただきました。ばらばらと話をしてしまって、上手く伝わったかどうかとても心配です。静岡と東京の方からのそれぞれの報告も、普段自分が取り扱って勉強したことがないもので、初めて知ることばかりでした。夜の交流会では司会を任せていただき、各県の取り組みや福島に来ることの意気込みや、近況などを聞くことができ、ギターに合わせて歌を歌うなんて高校生の頃を思い出しました。

二日目のフィールドワークでは、3年経ってなお復興が進んでいない福島の今を見させていただきました。被災地と呼ばれる場所に行くのは人生で初めてでした。松川浦や小高で一階部分が柱だけになっている家や、家の基盤やトイレ、風呂、玄関のタイルだけが残り、そこいらに瓦の割れたのや、お皿の破片などが散らばっておりかつてここで普通に暮らしている姿を想像することができました。ある家では震災の日そこで亡くなった方がいたのか、お花が手向けてある場所がありまし

た。家を丸々飲みこむような津波、逃げられず飲みこまれていく人の姿を想像すると本当に恐ろしく、ぞっとしました。さらにぞっとしたのは、小高でガイガーカウンターで測ったときに通常より少し高い数値が表示され目に見えない、臭いもしない、味もしない、放射性物質の恐怖をそこに感じました。

三日目の福島大学の学生との交流会は、私にとってとても新しい発見となりました。学生が主体となり、活動を運営しており、明確にニーズを捉え、自分達の課題を把握し、その為にどう行動すべきか理解しているという点に同じ大学生として尊敬しました。

今回福島を初めて訪れてみて、今政府がすべきこと、私たちにできることはなんだろうと考えた際、「忘れないこと」ではないかと思います。現地を訪れることが一番ですが、無理なら福島の現状をきちんと知る機会を作ること、皆で問題意識を持つことが大事だと考えます。私は今回の集いとフィールドワークから、人に伝えることを実践したいと思います。SNS や自分の周りにいる友人に福島で見たもの、感じたことを伝えたいです。そしてまた、個人的にも福島を訪れたいと考えています。

今回はこのような学習の場を作っていただき、ありがとうございました。司会などを多く任せていただき、いろいろ緊張することもありましたが、とても勉強になった三日間でした。また皆様とお会いできる日を楽しみにしています。ありがとうございました。

## あたらしい大切なことを勉強

ボラトワ・シャリアット（カザフスタン・高校生）

8月20日の朝、みんなといっしょに福島に行きました。この日、東京、広島、山口、静岡、埼玉、高知から人が来ていました。みんなは自己紹介をしました。そのあとでいっしょに歌いました。みんなですごせた時間がとてもおもしろかったです。

21日には仮設住宅に行きました。いっしょのグループには広島と東京と山口の高校生がいました。おじいさんとおばあさんのお話を聞きました。みんなは話をよく聞きました。そして準備体操をしました。とてもおもしろかったです。準備体操は2時間くらいしました。いっしょにカザフスタンのダンスをおどりました。みんなはダンスがうまかったです。そのあとでおばあさんといっしょに折り紙をしました。あたらしい折り紙をつくるのを学びました。ほかにも、いっしょにカザフスタンの折り紙をつくるのを教えたりもしました。カザフスタンの折り紙のなまえはチューリップの花です。

この三日間、私はあたらしい大切なことを勉強しました。福島は今はとてもきれいな町です。福島に行ってとてもうれしかったです。カザフスタンに帰って、わたしは今回のことを伝えたいと思います。みなさん、ありがとうございました。

## 福島の現在と未来

稲田泰河（高知・高校生）

この夏、私は以前から一度は訪れたいと思っていた被災地・福島県を訪れました。2011年3月11日、東北沖太平洋地震を中心とする東日本大震災が発生しました。地震による津波被害と、福島第一原発がメルトダウンしたことによる放射線の汚染は今も続いています。福島県は他の被災県と違い、放射線の問題が深刻なので、がれきを撤去して復興をめざすということもままならない状況にあります。去年宮城県を訪れた時、がれきはだいぶ片づいていて、今から復興をしようという雰囲気を感じました。福島でも復興への思いは感じましたが、現状はまだ復興を感じとれるものは少ないと思いました。

仮設住宅を訪れて、住んでいる方から話を聞きました。私は仮設住宅に伺うまでは話を聞く際に少し暗い雰囲気になるのかなと思っていました。しかし、実際にはとても明るく話してくれました。その方は家が被災し、「昼間は帰れる地域」に自宅があるため、仮設住宅に住んでいるそうです。「昼間は帰れる地域」に住むことができるようになるのは、平成28年3月からだそうです。それも今の「予定」なので、これから変わる可能性もあり、まだ不透明な状況だと思いました。こういうことから、福島県の復興はまだ実感できることが少ないように思いました。

漁港でもお話を聞きました。昨年、宮城を訪れた際にも会った方です。昨年は「今は試験操業をしています。今の時点で出荷できる魚もあります。しかし福島県産は危ないと思われていてあまり売れません。」と仰っていました。今年は「試験操業は続けています。福島の海産物は何重にも検査しています。しかし、まだ危険だと思われていて売れません。試験操業を行える魚種も増えてきています。」ということでした。ずっと試験操業を続けていて、震災や風評被害に負けないという力を感じました。

農家の方にもお話を伺いました。その方は福島でも笑顔で元気に農業ができるように政府と交渉しているそうです。話を聞いた中で、政府に非協力的な面があることに驚きました。去年収穫したお米1170万袋の放射線検査をしたところ、72袋から100ベクレル以上の放射線が検出されました。なぜ放射線が検出されたのか検査したら、カリウム不足の田んぼは放射線を吸ってしまうということがわかったそうです。そして今年田んぼにカリウムを蒔いてお米を育てたところ、1100万袋中28袋に減少したそうです。28袋中27袋は南相馬市で原発から20キロ圏内にある田んぼでした。なぜなのか調べていたところ、福島第一原発三号器を片付けしていた際、放射線のついた埃が舞い上がって穂がでる時期に付着したということがわかりました。その事態は東電も農林水産省も知っていて黙っていたそうです。政府は復興と言っていますが、行政や東電が非協力的な態度だと復興は進みにくいと感じました。最近では東京で東電や様々な町を相手に交渉しているそうです。交渉では復興庁が役にたっていないということに驚きました。復興庁は「わからない」の一点張りだそうです。だから、復興庁というのは名前だけだと思いました。フィールドワークの中では、復興すら始まってないと感じられたところもありました。しかし、お話を聞いた方はとても明るくて、みんな震災を乗り越えようとしていると感じました。「復興を成し遂げる」という意気込みをととても強く感じました。



最終日の午前中に福島大学災害ボランティアセンターの方にお話を伺うとともに「紙に書いて話し合う」を行いました。「紙に書いて話し合う」は複数のグループにわかれ、私のグループでは「福島に一回は来てほしい」ということになりました。そして、その一回をどう作るかということが問題になりました。私が思ったのは、学習会は各地であってもその存在が高校生からはわかりにくいというのが現状だということです。福島から帰った後に、友達に福島のことを話したら「自分も行きたかったが、学習会があることを知らなかった」と言われました。私は福島に来る初めの一回を作るためには、学習会の存在をもっと広くPRすべきだと思いました。今回は山口、高知、広島、静岡、東京、埼玉、福島から多くの学生が参加していましたが、参加したかった人はもっといると思いました。幡多ゼミは今高校生三年生が3人しかいません。私は高校を卒業してもゼミにはできるだけ参加する予定です。できるだけ多くの人に参加してほしいと思いました。

## 僕らの背中に福島未来を乗せて

田村俊法（高知・高校生）

僕はこの夏、『2014 震災・核被災に向き合う青年・学生の集い』に参加した。昨年度は、宮城県に行ったが、今年は福島県に行くということで昨年度では見てこれなかった部分を、より深く知り被災から約3年が過ぎた今、仮設住宅の方々が、普段どのような暮らしをしているのかを知りたいと思い参加を決めた。

今回の旅で1番印象に残っていることは、8月21日に行った南相馬市・相馬市松川浦でのフィールドワークである。放射線量が高いことは事前に知っていたが、南相馬市に入る前のバスの中で、ガイガーカウンターが示した0.44マイクロシーベルトという数字には流石にゾクッとした。僕たちは地上から約2メートル上にいるにも関わらず、基準値の約4倍という、やや高い数値を示していた。除染も行われているはずなのにこの数字だ。バスから降りれば、もっと高い数値が出るに違いない。僕は、背筋が凍る程の恐怖を覚えた。

国道6号を經由して南相馬市鹿島区の仮設住宅を訪問した。仮設住宅はテレビ等で何度も見たことはあったが、実際に生で見るのは初めてだったので<sup>とて</sup>逆も衝撃を受けた。天井は低く、壁も薄い、床は椅子を引くだけで重たい音が響く。僕はその音に少々驚いたが、住んでいる方たちは、もう慣れているのか普通に過ごしていることに、やや違和感を覚えた。『自分の家にも帰りたいけど、危険区域だから、もう戻れない。』その言葉を聞いた時、返す言葉が見付からなかった。こうして、僕たちが普通の生活を送っている間にも、逆も過酷な暮らしを強いられている事実<sup>とて</sup>に改めて気づき、自分にも何か出来ることがあるはずだと強く感じた。一通りお話を聞いた後、最後に皆でスイカ割りをした。ところが全然、スイカが割れずに苦戦する高校生たちを見て、今日一番の笑顔で応える、おじいさんおばあさんたちの顔は逆も印象的だった。『早く元の生活に戻ってあげたい』それは僕が率直に感じた言葉だった。

今回の旅に参加して本当に良かったと改めて実感することが出来た。普段何気なく生活しては分らなかったであろう仮設住宅での不自由な点や、暮らしている方々が抱えている悩み、汚染

水や風評被害の問題等、僕たちのこれからの課題が明確となり、今まで気付かなかった細かい所にも、目を向けることが出来た。自分の住んでいる所は大丈夫だとか、他県で起きた問題だから自分とは関係が無いということ等で目の前の問題に背を向けてはならないし、この教訓をこれからの未来にどう活かせるかが、僕たち生きている者、残された者の責任ではないかと強く痛感した本当に貴重で価値ある旅だった。

## 自分のこととして

清水隆成（山口・高校生）

今回、福島でのボランティア活動に参加できて本当に良い経験ができました。

地元の漁師、農家の方々や仮設住宅で暮らす高齢者の方々のお話は、今までテレビや新聞では見聞きしたこともないことばかりで、今までの自分の被災地に関する知識の少なさに気づかせてくれました。

福島は、無限に広がる青空と広大な田んぼがとても綺麗な場所でした。地元に住む人々もあたたかく、県民が復興のために一致団結している様子が身に沁みて感じさせられました。こんなに素敵な環境に、国が放置したせいで人の住めない環境になってしまう未来が待っている気がして、悲しいです。

この被災地に関わる問題は、大人たちだけでなく、自分たち学生もそれぞれが自分のこと、自分が住む国の大事な未来に関する事という認識と自覚を持っていくべきだと思います。実際、多くの学生は3年前の東日本大震災を過去のことと割り切っています。私はそうとは思いません。まだまだ多くの人々が、悩み、苦しみ、戦い続けています。まだ過去このことと割り切るには、早すぎます。私は、今後、被災地の復興に少しでも近づく活動をしていきたいと考えています。本当にありがとうございました。

## 参加して本当に良かった

田中和樹（山口・高校生）

今回の福島の集いには、山口県高校生交流集会実行委員会の役員として参加しました。福島では、たくさんの方々のお話を聞き学習しました。特に、広島の大學生がいわれた「このままでは終われないし、終わらない」の言葉がとても印象強く残っています。また、相馬市松川浦の漁師さんたちのお話や東京電力と戦う相馬市農民連の方のお話、南相馬市の仮設住宅に住む地元の人々との交流など、たくさんのお話と体験をし、福島の現状やニュースでは取り上げない情報など、たくさん学ぶことができました。今回の福島の集いに参加して本当に良かったと心から思います。そして、福島のいち早い復興をお祈りします。

## 広島高校生 福島研修旅行のまとめ

日野祥子（広島・高校生）

20日 セレモニーでは、まずシャリアットさんの舞踊を見ました。衣装や動きのキレがすごくて同じ年齢とは思えませんでした。次いで映画「種まきウサギ」の紹介版を観ました。

私と同年代の人たちが苦しいけれど、一人一人が頑張りそれを他県の人たちが支えている様子を見て感動しました。朗読もとても感動しました。その後のシンポジウムでは、広島の上二先輩が4度もカザフスタンへ行っていることを知りすごいと思いました。

そのカザフスタンでも原発の増設について賛否両論があることを知り、又その増設に日本も深く関わっていることに驚き複雑な気持ちになりました。実際に現地に行くことでわかることがたくさんあるなと思いました。

シャリアットさんからカザフスタンでの核実験の様子が詳しく説明されました。岡崎さんは多くの方から聞いた第5福竜丸の被爆の実相を話されました。村山さんは東京の平和ゼミの活動を知らせて下さり刺激になりました。特に「核は終わらない」という言葉のように、子孫に影響が出てくるので少しでもその確率が減るように考えて行動したいです。

21日 先ず相馬漁協の方達のお話を聞き、震災で1119名中の101名の方が犠牲になったこと。729隻中の576隻が壊れる被害を受けたことに胸が痛みました。今もなお出荷制限が36種類に及び、厳重な検査を受けた後に出荷されていることを知りました。被災地の産物ということで食べないという人も多くいます。複雑な思いです。

午後から仮設住宅を訪問しました。

「家が建った」「家族と住めるようになった」等、よいお話も聞くことができました。一緒に体操したり、シャリアットさんからカザフスタンの踊りを教えてもらったりして交流を深めることができました。皆さん楽しそうにしてくださり、私も楽しかったです。その後、折り紙を一緒に折ったりして笑顔がたくさん見ることができてよかったです。

22日 福島大学災害ボランティアセンターの方々とのワークショップがありました。津波被災現場での復興支援活動や仮設住宅での季節毎のイベントや交流活動、さらには足湯の設置など様々な活動をされていてすごいなと思いました。このような取組の中から被災者の心の内が語られたり、そこからまた新しいアイデアが生まれたり、福島だからこそ出来る活動なのだと思います。これらの報告を受けて、私達は3日間の感想を話し合いました。皆さんが一人ひとりの意見を聞いてくれて、それをまとめていく事で、自分の中でも考えを整理することが出来ました。現地だから出来ることがすてきだと思いました。

3日間を通し、実際に見て感じることはニュースなどで見るより正確で、とても大切だと感じました。また考え方を改めることも出来ました。ここで出会った方々から聞いた話は、自分の中だけで収めるのではなく、多くの人たちに伝えたいです。そして福島復興に少しでも力になりたいです。私達が広島から福島へ出発した時、広島では豪雨により土砂崩れの災害が発生し多くのいのちが奪われる被害がありました。今でもまだ家々がつぶれたままの状態です。土砂が入り込んだままのところも多くあります。私達も広島に帰った後何度かボランティアに行きました。広島も災害から立ち直るまでに時間がまだかかると感じました。福島で学んだ事を生かし、私達に出来ることを続けていきたいです。

久保隅蘭奈（広島・高校生）

第1日目の8月20日は戦争や核のことについて深く考えさせられました。シャリアットさんの話から、カザフスタンでは放射能の影響で今もなお奇形児が生まれたりしていて、胸が痛くなりました。すごく心にぐっと来るものがありました。この福島地ではどうなるのでしょうか。各県の活動報告もすごいなと思いました。

第2日8月21日に印象に残ったことは仮設住宅を訪ねたことです。どんな方々が住まれているのか少し緊張していたけど、皆さん一人ひとりがとても良い方ですごくあたたかい気持ちになりました。皆さんを見ていていろいろ力をもらった様な気がしました。私も少しのことでくじけちゃ行けないなと思いました。自分にも何か出来ることがあれば一生懸命取り組みたいと思いました。とにかく1番大事なことは「笑顔」だと思いました。一人のお婆さんから聞いたお話は、「姉妹みんなが流され、ご自分も一緒に流された」そうです。「自分だけが助かり、今でも涙が止まらない」そうです。「命が助かっただけでもありがたい」と話されていました。

大窪健志朗（広島・高校生）

福島研修旅行1日目を振り返り、シャリアットのカザフスタンの踊りを見てなかなかハードだなと思った。次に、「種まきウサギ」を観て震災後の漁師の人たちの活動等から、水や食べ物も簡単には食べられないことを知った。15時から行われたセレモニーでは、二上さんがカザフスタンに4回も訪問したことや、安田女子高社研部のOGだったことが分かった。シャリアットは、自分たちと同じ年と言うことが分かったし、将来の夢が医師で、子どもたちを救いたいという夢があることも分かった。東京高校生平和ゼミナールの村山さんは、高校生なのに大人みたいにしっかりしているなと思った。夜の交流会では、各県の報告を聞いて色々な活動をしていることを知ることができた。夜寝る前には、村山さんの話になり村山さんは毎日5時起き、通学時間は3時間で帰宅時間は部活に入っていないのに21時に家に着くことが分かった。

「相馬漁協」の漁師さんから聞いた話に衝撃を受けた。震災前に、1,119名いた組合員が震災で101名が犠牲になったことや、729隻あった漁船が震災で576隻が全損、または一部損壊したこと。平成23年4月に魚介類で初の摂取・出荷制限になったことなどの話を聞いて、震災後の福島県漁業の現状を初めて知ることができた。また、魚などを出荷するのに何重にも検査を行っていること。検査を行って安全で安心な魚介類を出荷しているのに、福島＝放射能というレッテルを貼られて福島県産を買う人が少ないことなどが分かった。風評被害にあっていることも理解した。

次に農家の立場から三浦さんの話を聞いた。三浦さんは、「故郷に戻ってもう一度暮らすことは夢物語」、「笑顔で元気な農業ができるようにしたい」、「希望は見えないが一つ一つ目標を立てて成功させる」というようなことを話しておられた。農業にも漁業にも深刻な影響があり大変だということを生産者自身から直接聞くことで理解できた。昼からは、仮設住宅へ行き、少しの間震災当時の話を伺うことができた。浜田ヨシコさんは、震災当時79歳で、トラクターで畑を耕してい

る最中に地震が何度も起きるとも「怖かった」そうだ。被災者の方から直接聞いて、当時がどれだけ酷く怖かったことが体に伝わってきた。他人からの又聞きではなく、自ら直接本人に聞くことが大切だということがこの活動を通して改めて理解できた。

体操後の交流会では、おばあちゃんと一緒に折り紙を作ったりしてとても楽しかったし、おばあちゃんの手が器用すぎてビックリした。

青少年会館での夜の交流会では、静岡の小林さんのルービックキューブを2分で完成させたことに驚いたし、「すげー！」と思った。自分たちの出し物も成功したので良かった。1時から始まった長谷川の会？では、長谷川さんは、とても面白かった。結局3時まで話してしまった。長谷川さんの名言「俺は、正直活動をするために、この旅行に参加しているのではない！。色々な県の友達を作るために参加しているのだ！」とおっしゃった。2日目の夜は楽しかった。2日目終了。

3日目の朝、寝坊をしてしまった。7時から朝食なのに、6時50分に起きてしまった。8時30分からの福島大のボランティア団体の学生との討論会は、とても深い話をしていたので、頭がついていけなかった。でも、色々なことが聞けたのでとてもいい勉強になった。各県代表感想報告では、各県素晴らしい感想を述べていたので、正直この3日間の感想をまとめられるか不安だった。なんとか自分なりにまとめることができたと思う。

#### 《この集いで学んだこと》

まず初日のセレモニーで、「種まきウサギ」を観て、福島の方の活動や全国の方が協力して支え合って映画を製作していることがよく分かった。シンポジウムでは戦争や核のことについて考えさせられた。放射能などの影響で奇形児が生まれていて、胸が痛くなった。すごく心にグッとくるものがたくさんあった。特に、「核は終わらない」という言葉のように過去に行われた核実験でも子孫にも影響が出るので、少しでもその確率が減るように考えたい。仮設住宅訪問では、楽しくていい人ばかりだった。この集いで学んだことを、広島に持ち帰り今後の活動について広島高校生平和ゼミナールのほうで考えていきたいし、広島で何か福島のためになる活動をやりたいと思った。学ぶことがいっぱいあった3日間だった。